

府中市生涯学習審議会（平成29年度第3回）会議録

1 日 時 平成29年8月9日（水）午後3時～5時

2 場 所 府中駅北第2庁舎5階 会議室

3 出席者（敬称略）

（1）委員15名

岩久保早苗委員、大谷久知委員、奥野英城委員、木内直美委員、岸定雄委員、北島章雄委員、佐野洋委員、関口美礼委員、相馬一平委員、寺谷弘壬委員、中西裕子委員、中村洋子委員、長畑誠委員、西原珠四委員、三宅昭委員

（2）職員7名

五味田文化スポーツ部長、沼尻文化スポーツ部次長、古田文化生涯学習課長、平野文化生涯学習課長補佐、宮崎生涯学習係長、山崎事務職員、諫山事務職員

4 報告事項

（1）配布資料の確認

- ・資料1 府中市生涯学習審議会（平成29年度第2回）会議録（案）
- ・資料2 平成29年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会 第1回理事会資料（抜粋）
- ・資料3 平成29年度第2回府中市生涯学習審議会 意見まとめ
- ・資料4 「府中市 人口ビジョン まち・ひと・しごと創生総合戦略」
- ・資料5 府中市の年齢別（3区分）男女別人口の推移（過去20年／5年ごと）及び2030年までの人口の推計

（2）前回議事録の確認

各委員に校正を依頼した前回議事録（案）について、市民に公開することが了承された。

（3）第1回青少年問題協議会について

平成29年7月7日（金）午後1時半から市役所北庁舎3階会議室にて開催。

（会長） 平成29年度の青少年健全育成基本方針が確認された。実際にどのよう

な実施状況なのかという報告と各委員の活動報告があった。青少年問題はニートや引きこもりといった問題に変わってきているが、犯罪数は少し伸びてきている。それを誰がどのように確認して指導するのかという点で統計を見たところ、児童相談所、警察署が多く、学校や家庭は非常にすくなかった。毎年の傾向ではあるがその理由について質問をした。あまり良い回答は得られなかったが、ニートや引きこもり、インターネットの問題点が今の府中市の青少年問題であることが確認できた。

(4) 東京都市町村社会教育委員連絡協議会 第1回理事会について

平成29年7月25日(火)午後3時から立川市役所にて開催。寺谷会長、宮崎生涯学習係長、諫山事務局員が出席。

(会長) 私が印象を受けたのは、社教連のお金の問題である。各個人が希望するのはどうだろうかという提案があったが、去年の7月から3月まで寄付を募ったところ359万円が集まったとのこと。1人1口2,000円となっている。意外と多く集まったのでないかと感じた。全国研究会と静岡で行われる関東甲信越静社会教育研究大会については、事務局から説明をお願いする。

(事務局) 1ページ目は、役員の輪番表となる。府中市は平成31年度と平成32年度に副会長、平成33年度には会長の年となる。2ページ目はブロック幹事について記載しており、来年度が府中市は幹事市となる。3ページ目は、社会教育委員の方のご都合がよろしければ参加していただきたいものを示している。12月2日(土)の交流大会、4月21日(土)の定期総会がある。詳細は後日連絡させていただく。4ページ、5ページは今年度のブロック研修会の詳細となる。第5ブロックは10月28日(土)午後2時から4時半を予定している。場所は三鷹市となっている。詳細は後日連絡するので、その際に出欠を確認させていただく。8ページから11ページまでは、関東甲信越静社会教育研究大会の説明となる。以前から少しお知らせをしているとおり、11月16日(木)から17日(金)の1泊2日となる。会場は静岡県沼津市で、内容は記念講演、シンポジウム、分科会等。市の予算の都合上、市からは2名分の交通費のみ負担可能。参加費3,500円、宿泊費、食事代等は参加いただく方に負担していただく。

申込締切りが9月15日となるので、希望される方は本日中に事務局までお声かけいただきたい。全国社会教育連合会の寄付金については、連合会の財政状況の悪化により、社会教育委員や社会教育に関心がある方に任意で寄付を募りたいというものになる。昨年度も依頼があったようだが、今年度も引き続き依頼が来ている。1口2,000円とのことだが、あくまでも任意のため趣旨にご賛同いただける場合はご協力いただきたい。

(以降の進行は会長)

5 審議事項

(1) 答申の作成について

(副会長) 以上の報告について、質問が無いようならば3の審議事項に入りたいと思うがいかがか。無いようなので、ここからの進行は会長にお願いする。

(会長) 配布された資料に第2回生涯学習審議会の議事録を大変うまくまとめたものがある。誰が発言したかは書いていないが、この様な内容を前回はディスカッションしたことが確認できる。今後私たちがどのように問題点を導き出せるか、どういう具合に答申につなぐことができるかをこの議事録を基にして話を進めたいと考えている。この問題・指摘は重要だという意見や自分の意見の補足などでも構わない。本日の会議の前半はこの議論に時間を割き、後半は佐野委員がまとめた資料について少し話してもらい、それを検討していきたい。

(委員) 資料3のまとめに沿って、項目ごとに議論していくのが良いと考える。

(委員) 「学び返し」という1つの大きなテーマとして掲げているが、実際は思ったほど実現できていないのが現状。考え方としては間違っていないのに、なぜ受け入れられないかを自分なりに考えてみた。自分と同じ年代の人が12～13人集まる会があり、府中市で何かやっているか・何かやりたいと思っているかを聞いてみた。全員やりたいと思っているが実際に何かやっている人は、その中の1人だった。「学び返し」について聞いてみたが、誰も興味を示さなかった。理由を自分なりに考えてみた。何かやろうとすると目標が必要でそれを達成するためにどうするかとなるが、「学び返し」は目標ではなく手段だと思う。目標がない中で手段だけを進めているような感じがする。これが、「学び返し」があまり受け入れられない理由ではないかと考える。「学び返し」の対象は、定年で会社を引退した人たち。自営業や農業、林業等に携わっている人は定年がない。現在のグローバル化の時代の会社に勤め

ている人は世界を相手に競争しなければならない。仕事内容も細分化されて、世界レベルの専門性を持っている人が増えている。スペシャリストが増え、ジェネラリストが減っている。そのスペシャリストを定年後に活かす方法は、定年延長や起業などがあるが、府中を始め一般的にはなかなかそのスペシャリストを活かす場所がない。だから、「学び返し」という形でなにかしようとしても受け皿がなく、上手くいかないのではないか。「学び返し」をしてもらいたい人たちはいろんな専門がある。その受け皿が漠然としていてあまり準備されていないので「学び返し」に惹かれないのではないか。

(会長) 祭りの太鼓や笛、踊り方というのは高齢者の方が技術をもっている。高齢者の方が学んできた技術を若い人に教えるのが「学び返し」だと思う。また、過去の委員でドイツに長く居てドイツ語ができる方がいた。定年になってやるものがなくなったので、ドイツ語を教えたいと思ったが場所がなかったということを知った。おっしゃるとおり、「学び返し」の場ができていない。できていないので言葉だけが先走っていて、府中市の「学び返し」という言葉が先行して評価された形になっているため、まだ実態が伴っていない。それがご指摘の通り問題である。

(委員) いきいきネットワークというものがある。これが東京都に6ヶ所ぐらいあり、その1つが府中にある。そこに能力を活かせるような場所があるのか知るために行ってみたが、そこでは自転車の管理や公共施設の整備等の単純な仕事が多い。もう少し頭を使うような知識を持った人を活かす仕事は無いのか聞いたが無かった。そういう仕事を探すシステムもなく、非常に限られていると感じた。

(会長) 府中市の公民館でロシア語を教えてほしいとの依頼があった。自分には時間がなかったので、今はアゼルバイジャン大使館の大使をやっている知り合いにお願いして2年間やらしてもらった。もっとやってほしいとの声もあったが、仕事が忙しくなり2年間だけ実施した。そういうのも一種の「学び返し」だとイメージしており、そういう場所がたくさんできたら良いと考えている。「学び返し」というキーワードは7、8年府中市で維持してきたもの。高齢者の方が活躍できる場所、高齢者が若い人にICT等学ぶ場所が必要。学んだものを地元・社会に還元する考えは重要だが、その場所の確保が問題。場所の提供については答申に盛り込むべきだと考える。生涯学習センターも第3者に入ってもらい講演会等を行っているので、府中市の意見がどこまで通用

するのか定かでは無いという面もあるのではないか。

(委員) 岸委員のおっしゃった「学び返し」についてももう一度考えてみるという意見に賛成。数年前に生涯学習ボランティアを始めた時から非常に違和感を持っていた。「学び返し」というのは自分の培ってきた経験や知識を学ぼうとしている人に返すというニュアンスで伝わっている。しかし、教えるという意味ではなく時間ができた高齢者が改めて自分で学ばなければならないと思うことだと思う。今までの経験というのは、時代とともに通用しなくなっていく。例えば歴史を学んだとしても、今の歴史とは全く違っていることもある。そういった時に高齢者も自ら学ぼうと思うことが、将来の持続する社会を作っていくうえで重要だと考える。これらの観点から、キーワードの「学び返し」は少し検討した方が良い。

(会長) 高齢者も学ばないといけないが、統計で高齢者が一番時間とお金をかけないのが教養と教育と出ている。その時に感じたのは、知識がある人たちを活かせる場所を作らなければいけないと強く思った。「学び返し」については、これまで時間をかけて作ってきたものであり、平成32年まで府中市が報告会を開く中で1つのキーワードになるのではないかと話を聞いていて感じた。

(委員) 誤解されると困るが、「学び返し」は価値のあることだと思っていて、それ自体を悪いと言っているわけではなく、機能していないのをどうやって機能させるかということについて肉付けをしないとせっかくのテーマが駄目になってしまうのではないか。そのためにどういうことをすればいいのかを検討すべきだと思う。

(会長) 場所と同時に、どういった能力を持った人が府中にいるのか、教える意欲のある人、あるいは一緒に勉強したい意欲を持っている人がいるのかというようなものが出来上がっていない。答申の中になるべくそのようなものを作るようにと今まで出してきたが、どういう人がいるのかあまり把握できないというのがネックになっている。

(委員) 今までの話の中で、コーディネーターの人が苦勞してやってもなかなか機能しないという話があった。あれは、優秀な人材がいてもそれを受け入れる場所が無ければコーディネーターも話の進めようが無い。そういう受け入れ先をどのように準備していくかが重要。そのための知恵が必要。

(委員) 「学び返し」がうまくいかない理由は、教えてあげるという上から目線に

ある。先ほど奥野委員がおっしゃったように自分をブラッシュアップするという視点が大切である。自分が学び返すという発想が重要だと考える。

(委員) 「学び返し」ではなく、「学び合い」というような感じでも良いのか。

(会長) 「学び合い」ということも入っている。「学び返し」だけではない。

(委員) 高齢者や若い人など立場の違う人がお互いに学び合うというのが、生涯学習に繋がるのではないか。返すということも大切なので「学び返し」になったのだと思うが、実際に起きていることは「学び合い」なのではないかと感じる。

(副会長) 「学び返し」というのを府中市の生涯学習の中に1つのテーマとして続けようということを入れていますが、言葉だけが動いていて実際の中身は地域で行っている伝承というイメージが皆さんに欠けていると感じる。今までの皆さんの話を聞いていると、自分たちが何か率先してやろうということが無い。他力本願で全てをやろうという感覚ではないかと受け止めている。やはり自分たちが一生懸命培った思慮を次の世代にどうすれば伝わるかというのが大きな意味を占めている。言葉だけが動くのではなく、そういうことを実際に教育の中でやっていくことも含めて提唱したはず。その辺のことを一緒に考えてもらわないと本当に言葉だけが独り歩きして何も成果が出ていないようになってしまう。実際には成果は出ている。いろんな祭りで太鼓の綺麗な音を出しているのは次の世代に伝承できているからである。そういうことを含めて考えると、「学び返し」というのは言葉だけではなく中身や行為も必要ではないかと考える。中身や行為が大事であり何も成果が出ないからダメなのだということではなく、そういう中から成果を見出していくということのも1つのやり方だと思う。

(委員) 府中にはお囃子があり、大國魂神社を中心として東が目黒流、西が船橋流というように流派が分かれている。府中でお囃子をやっているといっても、流派が分かれていることはわかっていない。そういうことから始まって、お囃子の継承・伝承を担ってきた者から言うと、楽しくなければ伝わらない。楽しい雰囲気を作ったり、こんな良いことがあるという考え方に持って行ったりしないと話が進んでいかないと感じた。お囃子に携わる人たちは皆、伝えるべきことを一生懸命伝えている。そしてもう1つ、府中市には18個分団がある。その方々が日夜一生懸命頑張っている。地域の中にはそうやってボランティア的なことをやっている団体がたくさんあ

るといことが皆さんに見えていないだけであって、地域の中で活動されている方はたくさんいるということ意識の中に置いて話を進めてもらえると良いと思う。

(委員) 「学び返し」の実施の難しさを感じる。一例だが、スポーツ分野では教える側も教わる側にも楽しさ・期待感を持って臨んでいるという思いを互いに共有している場合が多いと思う。4年前の東京国体開催の際、府中市では炬火リレーを行った。54年前の東京国体の感動を今の若者たちに伝えたい思い、他市に類を見ない市内全てをくまなくまわる規模で計画した。市民一般公募を行ったところ、小学生110名、中学生136名、高校生から77歳までの方は79名、総勢325名の走者、協力役員・関係者416名と多数の市民沿道応援者の皆様がこの炬火リレーを楽しんでくれた。「学び返し」についてだが、特に新しい企画を始めるには双方に企画の楽しさ、参加する楽しさ等の楽しそう・なにか期待できそうだと感じさせる工夫が必要だと思う。

(委員) 自主グループも高齢化になっているが、参加者が楽しく趣味として学んでいるので辞めることなく続けている。それが「学び返し」という形でできるかはわからないが、自分を高めていくということは年をとってもできると思う。趣味にしまえば、それを高めていけるので責任も考えずに楽しく生涯やっていけると思う。高齢化によって中央文化センターの自主グループは210団体から150団体に減ってはいるが、「学び返し」とまでは言えないが人生を楽しんで過ごしているように思う。楽しいところがないと感じている人もいらっしゃるようだが、私はこのように感じている。

(委員) 平成31年度からの10年間を考えるとということで「学び返し」について検討しているが、事前に頂いた資料3を読み、20年後の府中を考え、どうしていくかを話し合うべきなのではないかと感じた。改めて、20年後、自分の定年退職時と、現在もうすでに定年退職された方とは全く状況が異なると考えている。今の高齢者の方は自分が子供のころに知っていた「おじいちゃん・おばあちゃん」とは違い、現役でバリバリ働いている方もおり、いろいろなことをしたいという意志と実行力、背景となる学歴や知性も持っている。そうした方々が都心で働いていて、いざ定年を迎えて地元に戻ったときに何もすることがないのは困るということで、「学び返

し」という形で地域の伝承等の担い手として活用しようという発想があったのではないか。しかし、それは20年後には通用しない。団塊ジュニア世代である自分は年金の支給が75歳からとなり、それまでは働くことになる。もしかすると、死ぬまで働くことになる。20年がどのようなのか想像できないが働きながら家族の世話もしつつ、地域でいろんな活動をするのは難しく、引退もないので、余裕を持って「学び返し」のような自分の経験や知識を還元することはできないだろうと思う。これからは、いつか引退したらと思っていると、いつまでも地域に関わることをできないまま終わってしまうことになるので、仕事や育児に忙しい現役世代のうちから、土日などに少しずつ、可能な範囲で片手間でできる形で、地域に関われるような仕組みづくりが必要なのではないか。また、現時点での団塊の世代以上の方々の多くは肉体的・時間的・経済的余力があるように見受けられるが、社会情勢を見ると、これから先もそれが続くのか疑問だと思う。そのあたりを踏まえて、このまま、この先10年のキーワードを「学び返し」とするのは違和感がある。キーワードは「学び返し」ではないのではないか。

(副会長) 「学び返し」という言葉ではなく、「学び返し」をするという行為が今の社会には必要。親が娘に料理を教えるというようなことが「学び返し」の一端ではないかと考える。その辺のところを踏まえて考えないと、「学び返し」はいらないというようになってしまう。

(委員) そうではなくて、中身は大切だと考えている。30代～50代の方が地域に参加しようとしても、きっかけや時間がないので、いろいろ教えてもらえるのは嬉しいことだろう。しかし、それはあくまで受け手としてであり、「学び返し」ではない。やはり「学び返し」と言うと、余裕のある定年退職した方が対象だと感じられる。例えば皆様は、私が今「学び返し」をしようとしたときに何ができると考えられるか。

(副会長) 例えば、同世代の方の子育てについて自然に受け継いでいると思う。そういうこと自体が必要であり、「学び返し」の1つである。

(委員) 学校ではたくさんの地域の方をお願いをして、いろんな場面で子どもたちに貢献してもらっている。例えば、1・2年生の生活科で地域を限らず高齢者の方に来てもらい、教えてもらっている。その結果、一緒に遊んでいる。これは、高齢者にとっては皆様が考える「学び返し」に当てはまる

かもしれない。学校の立場から言うと子どもたちにいろいろな知識を与えていただく際に、高齢者の方から学んだことを小学生が今後どうやって活かしていくかや、今現在どんな遊びが流行っていて、自分たちはどう遊んでいるか等をお互いに話し合うことにより、教えていただいたお返しを小学生なりにしている。小学生の立場から言うとそれが「学び返し」となっていると思う。それぞれの立場でそれぞれの「学び返し」があるのではないか。

(会長) 大きく捉える、一種の文化交流である。ただ、定年になったから教えるのではなく、働いている人も教えていることもある。自分の知っていることは教えてあげたら面白いと思うし、相手も興味を持ってもらえると優秀な人がどんどん出てきて面白いと思う。だから、定年になって暇になったから教えるということではない。おっしゃる通り若い時からいろんなことをやっておくことが重要である。府中市も一種のベッドタウンであり、丸の内や新宿に勤めている方が京王線にも多くいる。定年の65歳まで地元と関係なく過ごしており、定年後どうすればいいかとなった時に地元もそういう人を受け入れがたいと思うので、若いうちからいろんな形でコミットメントするのが1番良い。早くからやっていることが1番良い。

(委員) 答申が10年計画なので、20年先を見据えて考えるべきだと思う。

(会長) 日本人で20年先を考えている人は政治家や企業家くらいであまりいないと思うが、できるだけ長期で考えた方が府中のためになると思う。

(委員) 第3次計画というのは平成31年から10年間のことを審議しているわけだが、その場合は20年先を見据えて市民がどういう生活・どういう立場にいて何に興味を持ってどのように地域の中で生きていこうとしているのかを見極めて方向付けをする必要がある。その時に20年は必要になると思う。

(会長) おっしゃる通りで、見極めるには難しい。自分も20年先を見据えた本を何冊か書いたことがあるが、全部外れている。次に、第2回生涯学習審議会後に佐野委員が資料を作成してくださった。その資料を佐野委員に説明いただき、事務局から統計の資料について説明を行ってからディスカッションを行う。

(委員) 参考1という資料をご覧ください。前回の会議の内容をメモしたものと人口問題について自分で調べたものを合わせてまとめた資料である。第3

次生涯学習推進計画の期間は2019年から2028年の答申である。議論にもありましたとおり、現在は知識基盤型社会といわれている。1980年代後半に、第2次産業従事者よりも第3次産業従事者が多くなった。それから30年以上経過しており、日本は工業化社会となりサービス社会となった。GDPの6割から7割はサービス産業で稼ぎ出している。学習が不可欠であり、普遍的な条件であるといえる。先ほどの木内委員の意見を聞き、若いうちから教授と供出の仕組みが地域に必要なだと感じた。そして、社会資本としての人という概念を府中市内に確立すべきだと考える。社会資本である人を流出させることで地域活性をしていくと良いと思う。そのための施策としてどのように具体的なことが考えられるかわからないが、地域の中に学び市場のようなものを設けるという案もあると思う。学びのクーポンやサービスクーポンの流通などの概念だと考える。その背景としては、世帯人数が減少している。前回の会議では3世代が共存するという事案もあったが、おそらく人口が減少している中では家族単位が崩壊し、共生世帯という概念が10年・20年後に出てくると考えられる。共生した世帯に向けて知識継承や流通が行われるのではないか。先ほどの場所の確保が重要という議論については、まったくその通りだと思う。資料にも載せたが、市民各階層の人々の居場所を創るべきである。物理的な場所を含めて、インターネット上の空間あるいは同じ場所でも時間帯によって使う人が違うなどの対応が考えられる。以上が前回の会議を踏まえて自分なりに考えたものである。補足資料として人口やGDPの動態資料がある。府中市は人口動態を見ても恵まれた市だと思う。積極的に若い人が地域で活動できる施策が考えられるのではないか。それに伴い、生産緑地や市民農園の設備・稼働率が必要だと感じた。あと数年で生産緑地の税制優遇期間が終わる。そうすると、生産緑地が宅地として放出されてしまう、あるいは税制優遇期間がさらに伸びる可能性がある。積極的に市が介入をして生産緑地を市民が積極的に関わることができるようにすると良いと考える。また、公道や私道、特に公園エリアが多くあるのでこれらの整備のための税制負担の軽減をすべき。人口動態の内閣府が出している資料の2ページ目の「現状継続のままでは人口は5千万人以下に」について、人口が増加したのは戦後であり戦後は7,000万人となり平均寿命が50歳になり、明治維新の時は13,000万人となっている。人口が減った

ということは2,000年前から考えると3回ある。1回目は縄文時代の終わり、2回目は平安時代の終わり、3回目は江戸時代の中後期にあり、今は4回目の人口減少を迎えている。社会保障費の推移も頭に入れて施策を考えた方が良くはないか。私の両親も高齢であり、最近よく考えるのは長生きのコスト負担である。学習するということも認知症にならないためのコスト軽減であり、スポーツも長生きコストを軽減する施策だと考える。聞くところによると、ホモサピエンスの生物学的な細胞の寿命は50年程度である。先ほど申し上げたように、平均寿命が50年になったのは戦後であり、世界的にはここ200年の出来事である。学習を通じた奉仕活動による社会教養、社会教養の中にも健康寿命の伸長などを含めたプランを生涯学習という枠の中に入れ込むべきだと考える。サポーターやファシリテーターについては、学習水準や技能水準をもう少しわかりやすくしてマッチングできるようにすべき。若い生徒に教えるのであれば、日本語を知っていても児童心理学をしらなければ難しい。水準の明示等がある程度わかりやすい形で蓄積し、活用するような仕組みを考えなければならぬと思う。最後にボランティアについては常々思っているが、有償活動と無償活動をわけたらどうか。有償活動というのはそれなりに企業が入ることを担保として、それなりの技能を受けるのであればそれなりのコストを払うべき。楽しいという概念はいろいろあると思う。活動して楽しい、ある程度の収入を得て楽しい等いろいろな視点に答えられるものを検討したいと思った次第である。65歳以上の高齢化率が日本は25%から26%であり、世界第2位はイタリアで20%から21%、アジア諸国は軒並み20%以下である。日本は群を抜いて高い割合というのが特徴である。

(会長) 事務局から配布資料4と5について説明していただく。

(事務局) 前回ご意見をいただいた、府中市の人口の推移等のわかる資料ということで、資料4は、平成28年3月に府中市で策定した「府中市 人口ビジョン まち・ひと・しごと創生総合戦略」となる。こちらは、ページ数も多いため、資料5として、「府中市の年齢別 男女別人口の推移（過去20年／5年ごと）及び2030年までの人口の推計」を事務局の方でまとめた。この資料は、2015年を基準年として、資料4の「府中市 人口ビジョン まち・ひと・しごと創生総合戦略」や、国勢調査の結果をもとに作成している。薄いオレンジ色でぬりつぶしているところが2015

年で、1995年からそこまでは実績値、そこから右側の、2020年、2025年、2030年は推計値となっている。まず、一番上の段の総人口をご覧いただきたい。1995年から2015年まで増加を続けており、今後の推計では、2020年までは増加するが、その後5年ごとに、約1,000人ずつ減少していく見込みとなっている。その下の段で、0歳から14歳までの年少人口のところをご覧いただくと、黄色くぬってあるところが 比率となっている。2000年から2015年までは横ばい傾向にあるが、2020年には13%をきり12.4%、その後5年ごとに、1%近く減少していく見込みである。次に、その下の段の、15歳から64歳の生産年齢人口をご覧いただくと、2015年には、マイナス3,801人となっている。これに関連して、資料4の「人口ビジョン」の14ページの真ん中に、年代別の人口の実績値と推計値のグラフがあり、その下に年ごとの人口が記載されている。2015年のところをご覧ください。このデータ作成時点では、2015年は実績値ではなく推計値となっているが、15歳から64歳までの人数について、17万3,000人の見込みとなっていた。しかし、実際はどうかというと、資料5の青く色をつけたところをご覧いただくと、169,863人となっており、見込みよりもかなり減少している。そのため、今後の実績もずれてくると推測される。比率としては、黄色の部分をご覧いただくと、20年前の1995年には74.7%だったものが、年々減少し、2015年には65.9%となっている。今後も減少し続け、2030年には64.1%になる見込である。最後に、一番下の段の65歳以上の老年人口について、黄色の部分が比率となるが、20年前の1995年には11.2%だったものが、増加し続け、2015年には倍近くの20.8%となっている。2030年には、人口の約4分の1の25.1%となる見込みである。

参考2の高齢社会白書（抜粋）をご覧いただくと、(1)のところで、2016年の全国の65歳以上の割合は27.3%、府中市は20.5%であり、国よりも低い割合となっている。そして、8ページの都道府県別高齢化率の推移の表の上から13段目に東京都がある。2015年の高齢化率は22.7%となっている。府中市の人口動態等についての説明は以上である。

(会長) 人口問題について議論を進めたいと思う。いかがか。

(委員) 大学はやりたいという意欲あるが技術は無い。そこで、技術を持っている日本のものづくりの会社を集める。やりたい気持ちとそれを実現する技術を合わせて1つのものを作りたいというのが目的。知識というのはニーズが無いと意味がなくなってしまう。ニーズをもとに技術を作っていないので、日本の医療機器は世界からすると海外からほとんど輸入している。誰かから必要とされているというニーズの部分とうまく吸い上げていないと知識があっても意味がない。英語ができるからと言ってリーダーシップがあるとは限らない、成功できる会社が作れるとは限らない。何か1つの技術があっても人間としての力がなければ意味がない。できれば、知識を持っている人は社会で経験を積んで、多くの人と関わって人間としての力が育まれると良い。経験は子どもたちや若者たちにとって財産となる。「学び返し」の中に、心としての部分や人間としての財産の部分もあると良いと思う。お年寄は体の面で限界はあっても心は若くいることができる。心を若く保つためには、自分が必要とされている、自分の持っているものが誰かの役に立てると感じる必要がある。今の若者たちにとっても自分という人間が必要とされているという生きがいを感じることもできる。これがしたい、あれがしたいという夢を持つことで力が生まれる。ニーズを引っ張ってきて、それに呼応することが大切。

(委員) 先ほど、「学び返し」が機能しているという話と機能していないという話があった。機能している点は、伝承というような型が決まっているものはある程度うまくいっている。他にも学校や消防などの地域活動に関してはうまくいっていると思うので、「学び返し」の成果は出ていると言える。一方機能していないという話は、自分の経験や学歴、職業をうまく返せていないという面が大きいと感じた。1つはブラッシュアップという話が出ていたが、おじいちゃん・おばあちゃんが子育てを手伝おうとしても持っている知識が今の時代とギャップがあり通用しない。なので、もう一度育児の知識を学び直そうという流れがある。自分のブラッシュアップが大切ということももちろんあるが、いろんな話を聞いているとマッチングシステムが無いのが原因と感じる。これを作るのはなかなか難しいとは思いますが、佐野委員が最初におっしゃった「市民各階層の人々の居場所を創るべき」というフレーズが大切だと思う。地域を知らない地域のために活動しようとは思わない。自分の20年後に余裕があるとは思わないが、余裕が無

くても地域で活動したいと思う。楽しいからやりたいと思う。30代・40代の人を対象に大人の文化祭などをやっているところもあり、その人たちを取り込む場所が必要。文化センターの活用を考えてみても良いと思う。文化センターを使った居場所づくりを考えていくのが良いと考える。

(委員) 人口動態については、平成31年から平成40年は人数的には多い団塊の世代の方々が80歳に近づく時期である。これから10年というのは団塊の世代の方々が元気に80歳を迎えられるようにすべき。府中市の人口ビジョンの7ページに「目指すべき将来の方向」がある。若い世代の話が出てきているが、若い世代を取り込む必要がある。今の話につながるが、生涯学習の中に若い世代の声を反映して居場所を創ることが必要。団塊の世代だけではなく、いろんな世代の居場所を創る。団塊の世代に目を向けることが重要。

(委員) 「学び返し」という自分が学んだことを還元するという行為は、定年退職後の高齢者が自分の知識を地域へ還元するということが中心となっているように感じる。そういうことも多いだろうが、子どもでも小学生でも中学生でも誰でも生きていく中で学んだことをたくさん持っている。例えばそれを小学生が高齢者に伝えるという「学び返し」もあると思う。私としては、「学び返し」という言葉は少し落ち着かない気がする。一緒に学んでいこう、どんどん学ぼうという言葉の方が納得できる気がする。資料3にもあるが、楽しくなければいけないということがあった。楽しくないと続かない。義務としてでは続かないので、生涯学習が楽しいからやりたいという気持ちが必要。教える方も、誰かにわかってもらえることが嬉しい、伝えたいという楽しさが必要だと思う。キーワードとしてはどういった言葉にすればいいかわからないが、楽しくやってみようということを入れたいという気持ちがある。音楽の方では、今年の12月に行うが、2年に1回、ベートーベンの交響曲第9番の演奏会を行っている。合唱の方々は市民が参加できるので、定年になったら一度歌いたかったという男性の方もいた。本人はもちろん他の合唱団員も一緒に楽しもうという意識がある。そういうことを見ていて、楽しくなければいけないのではないかと感じた。ある程度年をとってくると、府中市内から他の地区に行くのも大変になるが府中市内でできることがあるのならやりたいという人が多いと思う。演奏会の来場者は地域の方も多く、アンケートをしっかりと書いてく

ださるのは高齢者の方が多い。自分がやってみたい、知りたいと思ういろいろなことを府中市内でできたらと思う。

(委員) 佐野委員作成の答申の検討資料中に一案が提起されているが、現状はこれが問題で、これを突破しないといけないという戦略的な課題が見えない。このあたりについて、どのように考えておられるかを教えて欲しい。

(委員) 私が思っていたのは、1964年の医療社会保障費は1兆円、その時のGDPは37兆円。現在はご案内のように、500兆円強のGDPで医療社会保障費は144兆円であり、144倍に増えている。そこを共助の中でどうにかしたいという思いが大きい。それは若い人たちの世代の負担を軽減するという意味であり、学習する・教え合うという肯定的な活動を通じて負担を軽減したいというのがベースにある考え方である。生涯学習というコンテキストからしたら、どうかと思われることもあると思う。関口委員からも20年後を想像できないという意見があったが、私も同意見である。人口動態も60年前あるいは100年前と比べると世代間の比率は全然違う。継承といわれる概念も変わっている。

(会長) 第2回に比べてより深く話し合うことができたと感じた。人口問題あるいは今後のプロジェクトの進め方も少し示唆があったように思う。次回からはだんだんとプログラムを本格化して進めたいと考えている。1番予測しやすい人口統計でも、経済統計でも大変だが、できるだけ長期的に良い案を考えられれば府中のためになると思う。

(委員) 配布資料に生涯学習フェスティバルのご案内があるが、これはぜひ生涯学習審議会委員の皆様に見学に来ていただきたい。

(2) 今後の日程について

事務局より、次回の開催日の候補として10月18日(水)と10月26日(木)の午後3時からを提示した。会長が各委員に意見を求めたところ、現時点では18日は4名の方の都合が悪く、26日は3名の方の都合が悪いということだった。途中退席された大谷委員に確認したうえで、参加者が多い日程で調整することとなった。

以上